東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十七卷第三號

流通界への通貨の發生消滅と二三の問題……小島昌太郎
ナチスに於ける國家像……中川與之助
企業の清算性に就て……大塚一朗
支那民船の經營に就いて……小泉貞三
大正初期の南進論……堀江保藏
彙報

昭和十八年九月發行

大正初期の南進論

堀江保藏

一　序言

明治二十年代まで華かに行はれた南方發展論は、その後四十年代に至るまで聲を潜めた觀があつた。蓋しその間、對支・對露問題等が山積して北方に對する經營が一日も忽にすべからざる狀態にあり、ために南方を顧みる餘裕が無かつたからであらう。然るに四十三年、竹越三叉氏の「南國記」出でゝその南進論が一世を風靡するや、これに呼應するが如く『南へ！南へ！』の聲澎湃として起り、更に大正三年世界大戰起りて我が獨逸領南洋占領の事あるや、南方への關心は俄に高まり、南方事情の紹介を兼ねて南方發展を說く者が續々と現はれた。

右の事情並に大正初年の主なる南進論者の所論については、既に本庄博士の「先覺者の南方經營」に要を得て說述されてゐるが、本稿に於てはいさゝかそれに蛇足を加へると共に、これを時代的背景との關係に於て考へて見ようと思ふ。

二　井上清

氏は明治四十五年六月より大正二年一月に亙り、實業視察者として南方各地を歷遊し、歸朝後「南洋と日本」（大正三年七月、大正社）なる一書を公けにした。氏は、我國の最大要務は開國進取の國是に則りて四方に發展するにありとし、年々の大なる人口增加率と稠密なる人口密度とを顧みて、『海外發展の志業微なりとせば、將來の運命や、眞に寒心せざる能はざるものあるを覺ゆべし。此故に興國の第一義は先づ國內に充實せる勢力を外方に注ぎて多々益々辨ずるの經綸を策せざるべからず』と論じ、進んで、邦人移住の好適地たる米國・加奈陀及び濠洲に於ける對邦人感情の良しからざる現在並に將來に於ては、邦人發展の爲に殘され

たるところは南米と南洋あるのみと斷じ、そのうち地理的・歴史的・人種的・經濟的に最も近い關係にある南洋こそは、邦人の特に驥足を伸ばすべきの地であると論じてゐる。

當時の北進論、卽ち人口・資本を滿韓に集注してその富源を開發すべしとの所論に對しては、これを開發して滿韓の民を文明と平和の恩惠に浴せしむるは日本國民の負擔すべき當然の歴史的使命であつて、双手を擧げて贊意を表するも、その議論は少くとも日淸戰爭當時に於て解決濟みのものであつて、これを未決の問題なるかの如く取扱ひ、新衣を飾らしめて今更持出すのは迂にあらざれば猾なりと論じ、要するに『吾人の論者に贊同するは、之を新問題としてに在らず、又た北米・南米及び南洋等に發展するを不必要としてにも在らず、率直にいへば吾人は既に滿韓の地を目して異邦異域と見做さず、帝國の延長し擴大せる所となすものの也。而かも此勢力範圍を保有することに依て、帝國々民の他方面に發展せざるべからざるの必要を緩和し得と思ふものあらば、是れ大なる誤解也、謬想也』と述べてゐる。

而も滿洲・朝鮮は既に人口稠密にして邦人移住の餘地乏しく、『唯大資本の威力を以て功を擧ぐるの外に各個人活動の天地甚だ狹きを覺えしむ』るのに對し、南洋は爪哇を除けば人煙稀にして鋤犂を入るべき廣漠の良地を存し、資本・勞力共にこれを提供する餘地大なるのみならず、通商貿易上の利益を豐富にすることも頗る容易であるとし、『這般の經濟的觀察を基礎として將來帝國々民の驥足を伸ばすべき所を擇ばんか、吾人は言下に南洋なりと答ふるに躊躇せざる也』と論じてゐる。

而して氏は本書の結論に於て、南洋を繞る蘭・獨・米・英・濠諸國の動向を概觀し、最後に曰く『吾人の南進論には些かも軍事的意味を帶びず、產業・通商及移民の上より觀察し、最も吾に近接せる廣茫無涯の大發展地あるを說明し、敢て膨脹的國民の奮起を促すのみ。時は今なり、一日遲るれば一日の損あり、一年遲

るれば英人進み、二年遲るれば獨人邁進し、三年遲るれば米人雄飛し、四年遲るれば濠洲人來り、五年遲るれば蘭人其根據を堅め、六年遲るれば支那人益々跋扈し、七年遲るれば印度人の數更に增加せん、若し十年二十年の後に至りて南洋の發展を語る、既に晩し』と。

要するに、所謂北守南進論に左袒せずして北進と同時に南進すべきことを說き、特に南洋が邦人發展の好適地であり、今が南進の好機であること、並に人口・資本共にこれを移して旺んに經綸を行ふべきことを唱導してゐるのである。

三　江川　薫（坦山）

氏は明治四十四年日本を出發して南方を歷遊し、歸來後先輩を說きて一商會を起しその經營の衝に當りし人、その歷遊記がこゝに紹介せんとする「南洋を目的に」（大正二年九月、南北社）である。

氏は二三年前より北守南進を唱へ居りしものゝ如く南洋各地に足を運んだのも所論の實現を期せんがためであつた。從つて當時の北進論乃至北進政策に慊らざりしこと井上氏と同樣であつて、『現時我民族發展の程度は、到底滿洲を以て滿足すべきにあらず。換言せば我が國人の滿韓發展は尙不自然的にして、他により以上の好植民地を要求するは識者の夙に認むる處なり』と述べてゐる。而して南洋遊歷の結果、南洋未發の富源は我國人が開發する第一の天職なるを知り、同時に我國民が渡航の困難なる兩米を望み、而もかくの如き近距離にある南洋諸島を等閑に附するを怪しめる氏は、『抑々移民地たるや、風土の本國に類似せると、人口の稀薄にして天產物の豐富なるを要件とせざるべからず』として、南洋がこの條件を具備せることを指適し、また南進は人類の本能なりとし、更に工業を以て國を立つる上にも、商業立國の理想を實現する上にも、海外移住者に原料の供給を仰ぎ、彼等によりて販路の擴張を圖るの方途に據らざるべからざることを說き、以て極力南洋への移住發展を唱へるのである。

要するに、氏の所論は北進よりも南進を急務とする

にあること恰も「南國記」に於ける竹越氏と揆を一にし而も邦人の移住を以て南進の中核となすのである。

四　中井喜太郎（錦城）

氏は大正元年及び二年の兩度にバタビヤと新嘉坡に遊び、その見聞・感想を「讀賣新聞」に連載し、更に之を一書にまとめて上梓した。これ「南洋談」（大正三年五月、糖業研究會出版部）である。氏の主張は、要するに、我國の富强を圖るは海外發展の一途にあり、故に盛んに海外に移住し、能ふべくんば植民地の開發を行ふべしといふにある。特に南洋のみならず、南支・メキシコ等まで要するに南方に向つて發展すべしと論ずる所以は、「古事記」に徴するに、南進こそ日本國民發展の根本的方向であり、從つて南方發展こそ日本人の天職なりといふにある。

而して北守南進論或は北進南守論に關して『予は此問題に處して如何に其の議論を決定するや、是れ疑問の迷宮にあらずやと、余答ふ、予の言ふ所は殆んど問題を成さず、北進南進總て可にして、日本國民は四方八面に發展すべし、北陸南海論も北農南商論も手當り次第に實行し、大和民族の機能を發揮せざる可らず』と述べ、再び「古事記」に據つて、『古代日本人の思想は世界統一に在り、（中略）今人たるもの古人の思想を以て思想と爲さゞる可からず、豈今人を以て古人に若かずとせんや、奮起せよ國民』と結んでゐる。

要するに、氏の南進論は必ずしも系統的には說かれてゐないが、行論中、當時の我國に海外發展の基本方策なく、政治あつて經綸なきを指摘せる點に於て、或は南洋のみならず南支やメキシコにまで着目せる點に於て、また南洋各地の狀態を卑近な例を以て紹介せる點に於て、當時の人心に可なりの影響を與へたものと考へられる。

五　內田嘉吉

その著「國民海外發展策」（大正三年十月、拓殖新報社）は、氏が臺灣總督府民政長官時代の著述である。本書

はその立場から書かれたものであり、從つて臺灣事情の紹介を兼ねて、臺灣を我が海外發展の根據地とし、以て國民が南方に發展せんことを希求せるものであるが、その所說には聞くべき點が頗る多い。

先づ當時の我國の多難なる國際的地位を指摘して、『所謂我日本帝國を指して世界の一等國若くは一流國と爲す所以のものは、其の眞實の意義に於ては、世界の一等國若くは一流國を對手として之を角逐馳騁するの謂なりと解釋すべきを至當とす、若し夫れ漫然一等國なり一流國なりと爲し、實力の之に伴ふや否やも顧みずして、獨り衒誇の聲に滿足しつゝある如きは、識者の最も憂ふる所なりとす、蓋し我國の一等國若くは一流國たる所以のものは、其資質及實力の上に在らずして、其任務及事業の上に在りと云ふべく、從て盛名よりも困難を意味し、光榮よりも自覺を意味するものと謂ふべきなり、則ち斷じて國人の樂觀を許さゞる所以と爲す』と述べ、次にこの實力の盛名に伴はざる所以を、國土面積の狹小、人口の過剩、國產の僅少、商工業の未發達の四點に求め、その匡救策として、商工發展策と同時に海外移住政策を採らざるべからざることを力說して『移民を外國に排出することは、土地と共に其富を擴延する所以にして、各己の分配は其割合に豐裕なるべきなり』と述べてゐる。その移住發展すべき地が南洋にありとすることはいふ迄もない。

當時の北進論或は北守南進論に對しては、氏は何れにも偏せず、四方に進出すべしと說くものであるが、而も米歐諸國の勢力が未だ完全には及ばざる南洋への發展こそ特に留意すべきであるとし、『今に於て疾く日本及日本民族の此南洋方面に發展すべきは、最も急切にして、些の躊躇あるべからざる所なり』と論じ、『唯だ其發展は政治的に非ずして經濟的なるを宜しとす、蓋し政治的の發展は、事直に列國の勢權に釣ると同時に、其志を遂ぐるに於て極めて困難なるものあるを以てなり、我國人は、專ら日本及日本民族の經濟的發展を策するのみ、此外毫も他意あるに非ざるなり』と斷つてゐる。

要するに氏の所論は、南方への移住を盛んに行ひ、以て我が工業のための原料資源を開發し、我が商品のための販路を擴大し、かくて國富を興して一等國たるの實力を備ふべしといふにある。

六　山田毅一

氏は國民新聞記者、夙に南洋に志し、明治四十一年南支・佛領印度支那・馬來半島より南方諸地域を視察、其後これを二度繰返し、更に日獨開戰後わが南進策の重要據點たるべき小笠原群島に渡り、歸來後一書を著はした。「南進策と小笠原群島」(註一)(大正五年八月、放天義塾)(註二)これである。

氏は先づ、開國進取は我が國是であり、海外發展は今や優勢なる國論となり、議論の時代を去つて實行の時代となつてゐるにも拘らず『呼號する者徒に衆くして、實踐する者甚だ少き』を指摘し、海外移住者の生活狀態を描いて『在外邦人の數、既に三十萬を算するも、彼等は東西兩半球の各地に散在しあり。其間系統なく組織なく、各自思ひ思ひに渡航し、或は人に雇はれて其使役する所となり、或は卑賤なる職業を操りて纔に能く過活するもの百中九十七八に居ること』を慨歎し、進んで國力の伸張、國威の發揚を望まば海外に植民地を開くに若くはなしとし、單なる移住によつて得るところなき所以を左の如く說明する。曰く『儼然たる獨立國に向ひ、幾何の出稼人が入込むも、幾多の移住民が渡航するも、唯彼等が生產事業の運用機關たるに止まり、其收益の大部は彼が手に歸し、我は僅少の賃銀を受けて、勞役に服するに過ぎず。約言すれば出稼の文字が示す如く、勞働者が糊口の途を海外に求むるのみ。其效果は繁茂せる蔬菜を間引きて、密生よりする患を除くが如くなるのみ。他の締盟國に移住するものは歸化して其國籍に入り、言語風俗一變すれば、一二代の後は祖國と沒交涉となり了り、全く移住國民に混化するを常とす』と。

その著例として獨・伊の合衆國移住民の狀態を揭げ『畢竟國內剩餘の人口が海外に吐出されたり、と云ふ

に過ぎず』と斷じ、續いて植民地建設の利益を說いて『殖民地の建設は則ち然らず。其發見に因ると、占領に由るとは論なく、祖國の版圖に屬し、國旗の下に、拓殖の事業を經營するなれば、其開墾する所は寸壤尺土も、祖國の所得たり。隨ひて其繁榮は國家經濟に利する所多きは言ふまでもなく、國家の勢力を增進すること極めて大なるものなり』といひ、『世の海外發展を唱ふる者、慮茲に及ばず、多數の邦人が外國に出稼ぎさへすれば、其目的を達するかの如く思惟す。何ぞ思想の單純なるや。今日に方り、苟も海外發展の實效を收めんと欲すれば、適當の植民地を獲得し、之を拓殖して大和民族の驥足を展べざるべからず』と主張してゐる。

轉じて太平洋の形勢を論じて特に思ひを日米關係の將來に馳せ、國防上、臺灣海峽を以て第一防禦線となすが如き退嬰策は國防計畫を全くする所以にあらず、よろしく海峽植民地地方を第一防禦線となさざるべからずとし、その基地として臺灣と併せて小笠原群島が頗る重要なる役割を演ずべき所以を詳說する。かくの如く太平洋の形勢を患ふる氏が南進の必要を力說するのは當然である。曰く『南進北守は一時論壇の好題目として、盛んに論議せられしも、畢竟机上の空談に過ぎず。國家の大計より云へば、南方固より進取せざるべからず、北の方滿蒙の野、亦豈に久しく現狀維持を以て足れりとせんや。然れども刻下の急務とする所は世界的舞臺に向ひて、國力を展べ、國威を揚ぐるに地歩を南西の方面に占めて、列强と衡を戰ふの據點となすに在り。日本帝國の振興、大和民族の活躍、此秋を逸せば、復た爾來の機なからんとす』と。

然らば南洋の何れの地に植民地を開くべきや、氏は南方諸地域の政治的・經濟的狀勢を歷史的・現實的に縷々說明して『南方發展といふ、その意義漠然たるが如くなれども、目指す所は蘭領東印度諸島にあり』とし、その開拓の好適地なることを經濟的・自然地理的・政治的に說明して『蘭領諸島は殖民地にして、米國・濠洲などと其趣を異にす。無人の境・荒蕪の地所在之

あり。我邦人が相率ゐて渡航し、日本村を建設して、各種の事業を經營するも、直接白人の利害に抵觸する所なければ、拒絶せらるべき理由なし』と述べてゐる。その移住發展の基地として、氏は小笠原群島を重要視するのであつて、前述の如き海外移住の無秩序・不振の現狀を繰返さゞらんがために、小笠原群島を以て植民的訓練所とし、こゝを基地として組織的・秩序的に海外發展をなさゞるべからずと主張するのである。

本書の結論に曰く『南海の天地は邦人の力によりて開拓せられん事、是れ予が深く希望し已む能はざるところなりとす。然しながら是を歐米諸國民が東南洋の天地に於てなしたる如く、冒險的に海賊的に、一定の方針なく、漫然として其の啓行をなすは不可也。かゝる時代は既に去れり、今日は、必ずや秩序あり、根據あり、後援ある人々の啓發によらざるべからず。かの徒手空拳、一攫千金を夢みる如きは斷じて不可也。予は以上の事實及び意見に基きて汎く世人が我が小笠原群島と南洋群島との關係を顧慮研究し、勇氣ある同志の蹶起と着實なる事業家の企業とを希望するもの也』と、更に南方發展の手段として海軍の大擴張を要望し、國防備はりて國家儼存し、國家存在して農工商ありと結んでゐる點は注意すべきである。

要するに、氏の南方發展論は、單なる國民經濟的見地を越えて、國防國家的立場からなされてゐるのであつて、當時の南進論中にあつて最も注目すべきものゝ一つであらう。

(註一)本書は出版と同時に多くの新聞紙上に紹介批評せられた。例へば「ジャパン、アドヴァタイザー」誌は『太平洋に於て、日本は將來如何に發展すべきか。太平洋は永久に其名の示す如く、太平ならざる恐なきか。此問題は國民新聞記者山田毅一氏の新著によりて論議せられたり。(中略)之を通讀するに、太平洋に向つて、其の勢力を新展せしめんとする日本の野心は歴々として見るべし』と評し、詳細に本書の內容を紹介してゐる。(本書再版本所收)

(註二) 放天義塾は著者等同志の海外活動機關にして、我國の秩序的海外發展の先鋒たらんがため、多くの人材を養成し、併せて海外的諸般の事業を行はんとするものである。本書出版の如きも亦その一事業にして、廣く海外發展思想

を鼓吹せんとするのがその目的であつた。

七　副島八十六

氏は既に明治三十六年十一月、日露開戰の前夜に於て南方經營論を說き、世人の南方への注意を喚起した人であるが、世界大戰に際會するや更に一書を著はして南方發展の急務なるを訴へた。これ「帝國南進策」（大正五年十月、民友社）である。

氏は先づ『箇人に天職あり、國家にも亦天職あり。我が大日本の天職は實に東洋の盟主たるに在り』と喝破し、然るにも拘らず國民の自覺足らざるのみならず、國富の點に於て外形上西班牙と伯仲するに過ぎざるを遺憾とし、天職を實現せんがためには『先づ國家の領土を確保し、外敵の侵入を擊退するに足るべき十分なる兵力を作るを要し、其の兵力を支持せんが爲めには亦十分なる富源を培養するを要し、同時に學術上・道德上・其他の一切の文明上、亦實に十分なる施設經營を完備するを要す』と說いてゐる。

東洋の盟主となることは要するに對外發展をなすことであり、從つて氏は所謂北守南進論を取るものでなく、『日本興隆の氣運は必ず當に東西南北に於ける進展となりて出現せざる可らず。（中略）機會の生ずる毎に、國力の許す限り、世界の公道と國際の條規とに抵觸せざる限り、四方八面に向つて大活躍を試みんことを主張』するものであるが、併し徒らなる領土の大擴張論には與みせざるものであつて『吾人は只、國家的統一の力弱く、國民的結合の精神に乏しく、宇內に獨立して列强に對峙し、自己獨特の文明を以て世界人類の進步に寄與するの抱負なくんば、是れ政治的亡國の現象にして、延いて箇人の意氣品性に甚深の影響を及ぼし、遂に國人を舉げて墮落敗頽の深淵に沈溺せしめんことを恐る』と警めてゐる。

而して氏が特に南進を主張するのは年來この方面の研究調査に從事せるに因るものであるが、これに基いて或は印度及び南洋の富源を詳記し、或は我國と印度及び南洋との關係史を說き、南洋の新占領地に言及し

ては其處を足場として南洋・印度の中央に向ひ手足を伸ばす要ありとし、『貿易上、印度南洋を支配し得る者は、卽ち全世界に於て優勝の地位を占むる者と謂ふべし』と斷じ、或は我が貿易及び海運の發展すべき必要と餘地の多大なることを實證し、進んで大戰が我が南洋進出に絕好の機會なることを示唆すると同時に、將來獨力を以て歐米諸國と競爭せざるべからざる狀態に立至るべきを豫想して識者の注意を喚起し、我が貿易界の缺陷と統計の不備を指摘して反省を促し、其他教育改善策や勞働者待遇問題などにも觸れてゐる。

要するに氏は南進を主張すと雖も、露はに植民地の獲得を說くのでもなければ、移住奬勵を論ずるのでもない。歸するところは、資本を投じて資源を開發し、貿易及び海運の發展を圖り、其等を通じて印度及び南洋に拔くべからざる勢力を扶殖すべしといふのであつて、そのためには歐米勢力がこの地域より後退せる現在こそ絕好の機會なるが故に、速かに實行方策を確立すべしとなすものである。併し氏の所說に於て注意すべきは、東洋の盟主たるべき資格乃至條件を說いて剩すところなき點であらう。

八　時代的背景

以上、數名の人士につき、その著述によつて大正初期の南進論を簡單に紹介した。當時南進を說ける論者にして尙ほ紹介すべきものに、林金五郎氏（「南洋」二册大正六・七年刊）、鶴見祐輔氏（「南洋遊記」大正六年刊）・山本美越乃博士（「我國民の海外發展と南洋新占領地」大正六年刊）其他の人士があるが、都合でこれを割愛し、最後に當時の時代的背景に就て一言しよう。

先づ上揭の論著が現はれたのは大正初年であるが、論者が南進思想を懷抱するに至つたのは少くとも明治末年に溯る。明治末年はいふまでもなく日露戰爭に大勝を博し、露西亞に代つて滿洲經營の擔當者となつた時であり、三十九年南滿洲鐵道會社創立せられ、更に四十三年には韓國の併合が實現した。また戰勝による國際的地位の向上と共に、淸・韓は勿論、廣く東洋及

び南洋諸地域に對する我が商品の販路擴大し、この貿易の伸張と戰後經營政策とに應じて工業・海運業等も發展の一路を辿りつゝあつた。卽ち一面に於て、政治的にも經濟的にも雄心勃々たる時代であつたといはねばならぬ。

併し乍らその半面には必ずしも樂觀を許さゞる事態が存した。之を國內的に見るに、思想界には不穩の潮流ありて幸德事件の發生さへあり、一般に實の伴はざる一等國の盛名に醉ひて浮華輕佻の氣風漲り、四十一年には畏くも戊申詔書が渙發せられた。また經濟的には、過度の企業熱の反動として四十年以來財界は一張一弛の狀態にあり、貿易及び貿易外の支拂超過による正貨の流出は事業界不安の底流をなし、整理緊縮政策をとるの已むを得ざる狀況にあつた。對外關係を見るに、日露戰爭以後米國カリフオルニア州の日本移民排斥運動頓に活潑となり、四十年十月、桑港の學務局は日本兒童の米國公立學校に學ぶことを禁じ、邦人商店や勞働者を迫害するの暴擧を敢てするに至つた。また滿洲を繞る日米關係は必ずしも樂觀を許さゞるものあり、卽ちハリマンの滿鐵を日米共同經營の下に置かんとする計畫が失敗に歸して以後、米國は或は滿洲諸鐵道中立案を提議し、或は列國の共同出資による滿洲銀行設立案を持出すなど、頻りに滿洲の權益への割込みを策しつゝあつた。更に對支關係に於ては、四十一年の辰丸事件以後、漸次危懼すべき情勢の展開を見んとしつゝあり、一般に南方諸地域に於ても、列國の角逐日に旺んとなり、その間移住邦人に對する態度には憂慮すべきものあるに至つた。

以上の如き好惡相あざなへる情勢の下に於て、北進論・南進論、或は北守南進論・北進南守論が朝野の間にしきりに唱へられた。北進論卽ち滿洲及び蒙古の經營に全力を集中せんとする主張にも大なる理由があつた。先づ第二の日露戰爭を豫想すれば豫め滿洲に確固たる地步を築くべきは當然であつて、例へば當時參謀總長にして滿鐵創立委員長たりし兒玉大將は、後藤新平子に初代滿鐵總裁就任を懇願するに當つて大にその

必要を說き、鐵道の經營・炭礦開發・移民・牧畜業の振興の四者、就中、移民を以て要務とし、『我若し滿洲に於て五十萬の移民と數百萬の畜產とを有せんか、戰機若し我に利ならば、進みて敵國を侵略するの準備となすべく、亦若し我に不利ならば、儼然不動を持して以て機會を待つに足るべし、是れ滿韓經營大局の主張なりと』論じた。[1]

次に上述の日米關係より見て、滿洲の權益に米國をして割込の餘地無からしむるためには、我が獨力を以て速かに滿洲經營の實を擧げる必要があつた。加ふるに、米國の排日運動によつて困難となつた海外移民の捌け口として、最も手近なところは滿洲であつた。四十三年一月、小村外相が滿韓移住集中策を議會に於ける演說中に織込んだのは、右の如き情勢に鑑みてゞあつた。その他維新以來の大陸發展論の傳統を引く滿支經營論者亦少なからず、對支聯合會なる活動機關も存した。

この北進論に對して、南方の形勢をより重大視せる人々は、北守南進或は南洋經略を主張した。この主張が旺んとなつたに就ては、前述の如く竹越氏の著書の出現が與つて力があつたが、更に對露關係の緊張が次第にゆるむにつれ、また南方への經濟發展が次第に好望となるにつれて、南進論は大いに擡頭し、加ふるに世界大戰勃發して世人の南方への關心俄に高まるや、それは頗る勢力を占めることになつたのである。前に揭げた數名の人士は、四方八面への發展を主張し、南進一途を說くものではないが、而も南進の喫緊事なる所以を論じてゐることはこゝに繰返すまでもない。而して何れの論者の主張にも、今日より見て肯綮に當るものゝ多々あること、亦繰返す必要を見ない。

併し乍ら當時の我國の現狀に於ては、南北併進の實行には不可能なるものがあつた。理想の實現は必ずや順序を追はねばならなかつた。南進論者の主張は今日に至つて漸く實現の機會を與へられた。而も今日我々は論者の議論のうちに尙ほ傾聽すべき點の多々あるを覺えるのである。

1) 大津淳一郎「大日本憲政史」第六卷、263頁